

逃げ水

子母澤寛



逃げ水

子母澤寛

逃げ水

◎校印廃止

定価四二〇円

昭和三十五年十一月十日 初版

昭和三十五年十二月一日 再版

著者 子母澤 寛

発行者 栗本 和 夫

印刷者 山元 正 宜

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(561)五九二一三〇

振替東京三四番

三見印刷・協和製本・加藤製函

逃
げ
水

目
次

蘆鶴

あら縄

妖怪

月明

落花

生涯の喜悦

評判

足摺

妙法寺

水魚

春陽

正道

大機大用

道

天下の師範

花と雪

不屈至極

金 合 室 七 亥 六 五 三 四 四 七 三 七 三 六 三 九

夏虫

黒い影

両御番上席

夕雲

夏雨蕭々

散る花

雲足

坂下御門

三月

淀の川瀬

蓮の花

大赦

三百人組

壬生狂言

禍根

歸路

城下の宿

八

四

九

三

八

三

七

三

七

三

六

四

五

五

五

六

五

茜羽織

一七〇

青い草原

一七五

一ノ橋

一八〇

一朵の雲

一八五

苦笑

一九〇

壬生屋敷

一九四

小塚原

一九九

千住ばなし

二〇四

広瀬屋

二〇九

若え奴

二二二

白無垢

二二八

夕風

二三三

小橋の夏雨

二三七

肌寒

二四二

早駕

二四七

旅寝

二五二

廿日闇

二五七

西風
陣笠
三人の男
惨敗
川原嵐
巨星
春
刀の糊
二張の弓
月明
山紫水明
三百坂
蛸薬師
指
伏見街道
繻帶
戦塵

三三
三六
三六
三七
三七
三八
三八
三九
三九
四〇
四〇
四一
四二
四二
四三
四三
四四
四四

鉢の水

三十四

空屋敷

三十九

道中

三十三

しら波

三十八

枯草原

三十三

双腕

三十七

三尺剣

三十三

風

三十七

賤機山

三十三

移住

三十八

明月

三十二

泥の舟

三十八

装幀
中尾
進

逃
げ
水

蘆鶴

天保六年二月十七日。後ちの槍の高橋伊勢守政晃、小石川鷹匠町の山岡屋敷に生る。幼名を謙三郎。長じて号を忍斎といつた。

述懐に言う。

野に山に

よしや餓ゆとも

蘆鶴の

群れ居る鶏の

中にやは入らん

と。

この朝。大空は殊に清澄で庭に丈余の古い雪柳の一むれが、まるで小さな森のように青く茂り合つて、花が真つ白く散つていた。枝葉隠れに石造りの空井筒、ここへ黄鵠鴿がとまつてゐる。

実父山岡市郎右衛門は、産湯にひたる我子を見て

「こ奴ものになる」

といった。肩幅の広い赤ん坊は、藍のふちをがっちりつつかんで腫を見開き、容易なことではその手を放さなかった。

お昼近く、隣屋敷の高橋家の隠居義左衛門がやって来て「どれ、わたしに抱かせておくれ」

といって、この子を抱くと、つか／＼と縁側へ出て行つた。垣根越しに見える自分の屋敷内の槍術の道場へその赤ん坊の顔を向けて

「今にお前が、あすこの主になるのだ」

と大声でいって、こんどは母のおふみの産褥の枕辺で

「おふみさん、いい子を産んだね。お手柄だね」

大にこ／＼で帰って行つた。雪柳の咲く右手に切戸一つで庭から庭へつゞいてゐる。

山岡家は、元高百俵二人扶持。市郎右衛門が御勘定方に出ていて足高百廿五俵をいたゞいてゐるが、隣屋敷の高橋家は元高四十俵二人扶持、これも義左衛門がお金奉行で隠居の後ち、つづいて惣領鍵之助が御勘定方へ出て足高三百俵だ。

おふみは義左衛門の娘で隣屋敷へ嫁入つたのである。帰つた後で、小さな声で市郎右衛門へいつた。

「御隠居どのは、妙なことをおっしゃいますねえ」

「おれが約定をした事があつたのをとんと忘れていたが、あの言葉をきいて思い出してな。困つた事をいつて終つた」

「え？」

「鍵之助どのがお弱くて、後嗣の出来る見込はとてもない。こんど男の子が出来たら是非ともわたしに呉れという。うっかりよろしからうと言つて終つた。が、今度の子はどうも良く出来過ぎた。やるのが惜しくなつたわ」

「まあ、そんなお約定をなされたのでござりますか。困りましたねえ」

「紀一郎が、あのように立派に仕込んで貰っている恩もあり、どうも困った」

紀一郎は、後ち天下随一の名槍静山となる人物。生れた子の兄だ。

＊

お七夜に、かねて懇意な深川油堀小松町の人相見一沢泰輔が見舞に来た。そして、やっと謙三郎と名のついたまだ目もあかない赤ん坊の顔をしげ／＼と見て

「ほう、これあ、大したもんだ。山岡さん、この子後日文武に達し英名天下にとゞろきますよ」

畳へ手をついて額をすりつけるように平伏した。御家人だが、深く禅機に通じ、相を判じかつてはすれたことがないという。

「また始まったか。おのし、紀一郎にもそんな事をいったが多寡が貧乏旗本の小伴だ、天下にとゞろくはねえだろう」

市郎右衛門は信じもしなかったが、やっぱり内心はうれしさに違いない。

「いや、わたしの相判に間違ひのある筈はない。さて／＼あんたは不思議な人だ。総領の紀一郎どのと言ひ、この子と言ひ、ほんとか、並の子じゃあござんせんよ」

「いよ／＼そうと定ったら、一ぱい献じなくてはならないかな」

「その通り」

一沢は深く泥酔して夜に入って帰った。真つ暗闇で、玄関まで送って出た市郎右衛門の目に、真つ正面に青く光る星が、妙にまぶしいように思われた。

弘化元年冬。

一沢は二年前からの病みつきで、小松町の屋敷にひどく貧しく暮らしていた。妻女おのぶはその前年に没し、子はなく、召使もない。それにこの頃はすつと床につききりだと言うことを、高橋の隠居が、出稽古先きできて来て、市郎右衛門へ知らせてくれた。

おのぶの死ぬ時は、おふみが殆んど泊り切りで、何かと介抱をつゞけ、お葬いも万端山岡でやってやったが、一沢は今度は、遠慮をしたものか、そんなに悪い知らせもよこさない。

「おふみ、行つてやろう。が、お前、大丈夫か」

市郎右衛門は、夫人の身をひどく案じているようであった。おふみは、性来の虚弱でふだんもねているようなことが多かった。

が、こう云う時には、市郎右衛門だけではどうにもならない。何かこまごました事は、まるで出来ない人である。

二人が小松町へ着いた時はもう短い冬の日がとつぱり暮れて、ずいぶん冷めたい風が頬にさわった。

一沢の屋敷の内は真つ暗である。

「おい、泰輔、どうしたよ」

市郎右衛門は、御家人屋敷独特の狭い玄関式台の外から声をかけた。しめ切った二枚障子の破れが目にしみてわかる。

暫く返事がない。

＊

市郎右衛門がまた

「山岡だ、どうしたよ」

と大声でいった。

「上つて来ておくれよ。面目ないが、もう足腰が立たねえんだ

よ」

割に元氣な一沢の聲が闇の中から聞こえて来た。

行燈もついていない。夫妻は、病間へ通つて、燈明油も無いのではあるまいかと思つたが、油だけはあつた。

一沢は寒そうにねている。

おふみが行燈をつけて

「如何でございますか」

のぞき込むようにした。一沢はぼう／＼の髭つ面を半分掌でかくすようにして

「御新造、人間は業の深いものだ、土壇場へ来てなか／＼死ねません、みつともなくまご／＼して」

「何をおっしゃるのでございます」

「いや、本当です。が、別に死にたくもない、といつて無理をして生きていたいとも思いませんが——ところで市郎右衛門どの、謙三郎さんもう十歳だ。どうです、わたしの人相見は当らんか」

「さあ、天下に名を成すというおのしの相学はどうかわからんが、槍だけはよく使う。高橋の隠居の説だと兄の紀一郎と今のところは五分五分だそうだよ」

「そうでしょう。紀一郎さんも先ず只者^{ただもの}ではない。が謙三郎さんもそれだ。あの二人が名を成してくれなくてはわたしも冥土で幅が利かねえからね、相者一沢泰輔はいかさまになる」

「それでは、冥土へ行くはまだ早かろう。伴の行末を見届け、ゆっくりおのれの相学をも見届けてからにしてはどうだ」

「ここ迄来ては、もうそうは行くまい。自分でよくわかる。長いことはない。実はゆうべも、死んだおのぶが出て来てね。何

かその辺を片付け物をしたりしながら、余り跡々が取りちらし
ていては見つともありませんからといつてね。あれにも生前確
な思いをさせなかつたが、やっぱり自分の主人だと思つと、冥
土へ行つても案じているんだねえ」

おふみは、何かと病人の食事の仕度などを整えたり、その辺
を綺麗にしたり、米なども運ばせたが、そんな間にも、一沢は
頻りに紀一郎謙三郎兄弟の事をききたがつた。

高橋の隠居は、槍も偉いが、薙刀、剣術も知られた腕だ。こ
の人が謙三郎には実にみつちり仕込んでくれる。それがまた並
ではなかつた。

謙三郎を自分に貰うということは、あれつきりこの十年間一
と言も口にしないが、それがもう当然の事で、云う迄もないと
いう顔つきが市郎右衛門にもおふみにもよくわかつている。お
ふみは、多少の不服もあつたが、次に信吉という男の子が生れ
てから、この人もまた謙三郎の事は、いつの間にかもう自分の
生家高橋へ行くことに定つて終つていゝような氣持になつてい
る。

ある時、隠居は

「おい、こ奴は武技を天から授かつて生れて来たのだ」

と市郎右衛門の前で、謙三郎の頭を押さえ乍らどっちの子供か
わからぬ調子でいったことがある。ふと、今、病みほうけた一
沢の前で、これを思い出して話した。一沢は床の中からだを
ゆすつて笑つた。

が、その一沢の死んだのは、その次の夜の四つ過ぎであつた。
外にはびゅう／＼風の音がして、破れかゝつた軒に落葉の飛ん

で来るのが耳についた。

次の日はひどい土砂降り。

お葬いで、市郎右衛門もおふみも、この雨に当って、冷めたさが骨身に徹した。

「でも、いい時に来合わせてやって良かった」

夫妻は、そんな事を云いながら、鷹匠町の屋敷へ帰ったが、ふだん弱いおふみは、帰るや否や俄かにひどい高熱でそのまゝ床へついて終った。

紀一郎謙三郎はねる目もねずに看病する。おふみはやがて回復したが、この時は、四番目の子を懐胎していたので、市郎右衛門の心配も一通りではなかった。

その年明けて弘化二年夏七月。市郎右衛門は下谷御成街道の刀屋鎌屋にいい売物があると云うのでそこへ出て行って、その刀を見たら偽物だ、しかも偽物にもよりけり、まるで人を馬鹿にした悪作なので、腹が立って、じり／＼しながら帰って来た。ひどい暑さで、焼きつくようなかん／＼照りであった。

朝の出がけから下痢の気味で、少し調子は良くなかったのだが、途中で急に目まいを感じた。それでも、知合の民家で水を貰い小憩して来たが、屋敷の門を見ると、もう意地も我慢もなく玄関へのめり込んだ。

丁度おふみは臨月であった。

市郎右衛門は倒れる、おふみはびっくりして産気づくで、その騒ぎしたらなかったが、騒ぎどころか、おふみは女の子を産み落しはしたが、そのまゝ氣を失って終ったものだ。

その悶絶の声を市郎右衛門もきいた。そして自分もまた氣絶した。

隣屋敷へ稽古に行っていた紀一郎謙三郎が馳せつけた時は、両親とも、もういけない。

*

稽古着のまゝ高橋の隠居も来た。

「こら紀一、父のからだへすがりついて声を限りに叫べ、力いっぱい叫べ——謙よ、お前は、母だ。さ、早く早く、強く強く」兄弟はその通りにした。しかしいつ迄叫んでも叫んでも父も母も蘇生しない。

「もって叫べ、もって叫べ」

兄弟は涙も声も涸れた。が、途端に先ず母が息を吹き返し、つゞいて市郎右衛門も、そっと細い臉を開いた。この時やつと番町の医師千葉碩斎（せきさい）というのが馳け着いたという。

次の夜、隠居は自分のところへ兄弟を呼んだ。

「お前ら、聞いたか」

「は？」

紀一郎がそういった。

「おれは聞いた。いや、この町中の滅法界な評判だ。いいか、御両親が蘇生なされたな。あの時にな、二つの人魂（ひとたま）がふわりふわりと山岡家の上を飛んでいたのを見た者があるのだ」

「えっ」

「本当だぞ。その者たちが怖る／＼見ている中に、一つの人魂は、忽ち屋敷の軒下に消えた。が、一つはまだふわ／＼宙にあった」

兄弟は、高橋の隠居の顔を穴のあく程瞬きもせずに見詰めている。はあ／＼と息がはずむ。

「暫く——といってもほんの僅かの間であらう。その浮いてい

る一つがまだそのまゝでいると、一度軒下へ入りかけたさっきの人の魂がまたふわりと出て来てな、宙に居る一つの傍へ寄って少しもつれ合つたと思うと、今度は二つが揃って降りて行つたというのだ。いいか、お前らこれをどう思う。わかるか」

「わたくし共の両親の人の魂でございましょうか」
と紀一郎がいう。

「そうだとも——先きの一つは母、一つは父だ。いいか、母が先ず蘇生しかけたが、後に父の魂が残っているのが気がかりで、迎えに行つたのだ。そのために二人とも蘇生した。母が自分だけ助からうと屋敷へ入って終つたのでは、父はもう蘇生出来なかつたのだ」

「はい」

謙三郎は、涙を落した。隠居は膝を乗り出して声を強くいった。

「両親のおむつまじさも然ることながら、いいか、よっききけ、一旦冥土へ旅立たれた魂が、再び戻って来られたのは、どうしてだ。これあ言う迄もねえお前らが、両親を思う孝行の誠の心の強さのためなのだ。これを忘れるな、人間の誠心というものは、これ程に強いのだぞ、死んだ人を生きかえらせる程に強いのだぞ」

あら縄

隠居は小鼻へ脂汗をにじませていた。

「武芸の道も同じだ、いや、人間の本当の生き方も、要はたゞ誠の一字につきるのだ」

といって、今度はから／＼と笑い出して

「ふむ、謙三郎にはまだわからんかも知れねえな。が、謙、覚えて居れよ、そして成人して、きつと思ひ出すのだ」

「わたくしは解ります」

十六歳の紀一郎は眉をあげてはつきり言った。

「お前にはわからう。鍵之助がきいたには、槍術拔群の旨を以て近々に部屋住のまゝ西丸御徒に御召出の噂があるという。それ程の奴におれの言う事がわからんでは困る」

高橋の隠居の槍は刃心流。伝えるところでは、淵源を菅原道真に発し、小菅菜隠翁から江州の人岡田土佐守永定、更に義左衛門に皆伝し八代目の家元に当る。

兄弟の稽古には、自分は櫛で拵えた一尺五寸程の扇子形を構え、相手には高さ一尺二寸の一本歯の高下駄を履かせ、常に心を空にして突っ込んで来ることを教えた。

意に充たなければ物凄い形相で罵言の限りを尽くして何百回

となく同じ動作を繰り返させる。兄弟が遂に死んだもののよう
に昏倒することも決して珍らしくはなかった。

この日、兄弟が帰って間もなく筑後柳川の藩士南里紀介がや
つて来た。皆伝の弟子ではあるが隠居より一つ二つの年上で、
髪髪は銀のように白く、しかし逞ましい眼光であった。

「先生、わたくしも人魂の噂をききました」

南里は意味ありげにや／＼した。

「何を笑う、こ奴」

と隠居は顎を撫でて

「この辺の女子供は大そう怖がつて、日が暮れると山岡の前は
通らんとする」

「そうでありましょう。見もせぬものまでが、われも見た、お
れも見たとはいっている。しかし先生の狙われたところは、世
間の思惑ではない、山岡の御息方はもとより、われ／＼門人
でございますからな」

「流石は柳川藩御用人、化物の正体、見ぬかれたか」

「いやあ」

南里は頭をかいた。

「全く、人魂などに飛び込まれて堪るものか」

隠居はそういつて

「有りようは、おのしらなんぞどうでもいいのだ。あの兄弟の
胸に、しっかりと染み込ませて置き度いだけのものだ」

「尤もです」

「ところでおのし、柳川へ帰るのはいつになったか」

南里は神妙な顔つきをした。

「明後日早晩の出発。お暇乞と共に先生、実はたつてお願の筋
があつて罷越しました」

「最後に一本使おうと云うのだらう」

「そうです。わたくしは御承知の通りの老齢、今お別れ申せば
再び先生の御師範をいたゞくことは出来ませうと思ふ。老人
骨を故山に埋めるの情はみたされますが、何分にも永年御厄介
をいたゞきました御道場に心が残ります」

「よろしい、明日辰の刻からやります。しかしどうだらう
ね、おのしのこの道場への置土産だ。一つ山岡兄弟に相手をさ
せて貰へぬか。わたしは、一旦槍をとればあれ達を外孫だなど
と考えてもいけないと、まあ自分では堅くそう信じているが、ひ
よつとして知らず知らずの中に、そんなものが出ていないとは
言い切れない。おのしなら、刃心流正統として、腕はわたしよ
り上であつても下ではない。そこで頼むのだ。あの二人へ情を
はなれた槍を本気で見せてやつて貰いたいのだ。おのしは江戸
を西に去る二百九十余里遠い故山へ帰る、わたしはまたいつ果
てるか計られない歳だ。あの二人へ本当の刃心流を見せるのは、
これが最後になるかも知れないからなあ」

南里は黙つてうなずいた。そして翌朝、まだ卯の刻前道場へ
やつて来た。
門を入りかけてはつとした。今日は稽古日ではないというの
に凄気合が道場の窓を突き破つて聞えて来るのだ。

暦の上ではすぐ秋が立つ。そのためか空は底深く澄んで、何
となくからつとしてゐる。南里は御徒町の上屋敷から歩いて来
たが、そんなに汗も出なかった。

急いで道場へ入つた。びっくりした。槍を構えて相對してい